
シッタ

栖坂月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シツタ

【Nコード】
N4347H

【作者名】
栖坂月

【あらすじ】
無いハズのものがあったら、人は怖いと感じる。では、在るハズのものになかったとしたら、どう思うだろうか。

（前書き）

正直に申し上げて実験作です。夏ホラー用に書いたものの、当初は没にする予定でした。

ですが、せっかく書いて無駄にするのも何ですし、どうして今一つなのかなーという明確な答えが見えないので、こちらに置くことにしました。

何というか、笑ってやってください。

時計の秒針が規則正しく時を刻む。

その間に、キーボードを叩く不規則な音が割って入る。

ここにメロディはない。あるのはリズムだけだ。

手を止めた瞬間、今日はやけに静かだと気付く。

いや、最近は、と言うべきかもしれない。そういえばいつからだろう。時計の音がこんなにも大きく感じられるようになったのは。

まあ、それがいつからであるにしても結構なことだ。何をするにも、静かで困ることはない。壁の薄い六畳一間の安アパートでは、静けさ以上に貴重なものなど滅多にないだろう。

起きてからの決まり事を果たすようにパソコンのスリープを解除したオレは、半ば習慣と化しているニュースサイトのチェックを終えてから、いつものようにハローワークを覗いてみる。

思った通り、目ばしい仕事はない。

ふう、と小さく息が漏れた。

落胆と安堵、その双方が混じりあっていることを実感する。オレ自身、自らの正直さに少し呆れるほどだ。

オレは今、世間で言うところの無職に該当する。だが、自宅警備員^トではない。築二十年以上の二階建てボロアパートではあるが、その一室を借りて一人暮らしをしている。快適とは言えないかもしれないが、生活に困ることは今のところない。

むろん、それは貯蓄が続く限りの話ではあるが。

とりあえず、一ヶ月やそこらで干上がるようなことはない。次の仕事は、それまでにゆっくり探せば済むだけの話だ。むしろ今、こうして貴重な静寂の中で自由を満喫できることを、楽しむべきだと思っている。

そういえば、あのスレはどうなっているだろうか。

そう思いつつページを開いたところで、喉の渇きに気付く。いや、

正確に言うとは喉は渴いていないのだが、長くなりそうな時は手元に飲み物がないと落ち着かないのだ。

「確か冷蔵庫に炭酸が……」

うる覚えの記憶をほじくり返しながら立ち上がる。

普段は気にもならないヒタヒタという足音が、まるで纏わり付いてくるようで少し鬱陶しい。冷蔵庫の扉を開く音がやけに大きく響き、オレを驚かせた。

何だろう。今日のオレはいつもより神経質な気がする。

そう思いつつ毛利印もつりのサイダーを取り出し、早速とばかりに封を開いて一口含む。いつもと変わらない刺激と冷たさだ。

そうだ。何も変わってなんかいない。ただ、少しだけいつもより静かだったから、調子が狂っていただけの話だ。

「そういえば、今何時だ？」

サイダーの蓋を閉めて手に持ったまま、オレは居間へと戻ってくる。

時計を見上げると、そろそろ五時半になるうかという頃合だ。しかし、これでは午前か午後かがわからない。オレは窓際へと歩み寄ると、カーテンに手を掛けた。

もし午前中であつたなら、その向こうに朝日が見えるはずだからだ。

だが、カーテンを横にずらそうと動きかけた右手が、意に反して動かない。いや、意に反してというのはおかしいか。オレは多分、このカーテンを開きたいと思っていない。

そもそも、午前か午後かなんて、昼か夜かなんて、どうでも良い問題じゃないか。好きな時に寝て好きな時に起きる。それが出来る今は、むしろ気にしないでいた方が幸せというものだろう。

世俗のことなど気にするのはやめて、オレはモニターの前に座った。掲示板を渡り、気になるスレを覗いて、いくつかの書き込みを加える。

今日は珍しく『荒らし』がない。こういう日の書き込みは気分

だから、もういい。

オレは全てを諦めるように、四肢の力を抜いた。意識が途切れる瞬間の、心地良さに酔いながら。

天井が見える。

目が覚めた。寝る前と何一つ変わらない景色が、当たり前のように広がっていた。

オレは安堵する。

安堵する？

どうしてだろう。オレは何に不安を感じているというのだろうか。確かに今のオレは不安定だ。次の仕事も決まっていないうし、そもそもこんなダラダラした生活がいつまで続くかもわからない。不安がないと言えは嘘になる。

でも、別に絶望しているってわけじゃない。仕事なんて贅沢を言わなければすぐに見付かる。ただ、慌ててつまらない仕事を選んだところで、長続きしないとわかつているだけだ。

今はこれでいい。

これでいいんだ。

オレは強引に自分を納得させて、いつものようにモニターの前に陣取った。

今日も静かだ。秒針がうるさい。

「あ、メール……」

メーラーを立ち上げるのは毎日の習慣だったが、プライベート用のアドレスに届いていることはあまりない。その大半が管理会社からのお知らせだ。

しかし今日は、珍しく母親の携帯からメールが届いていた。

開いてみると、その文章は簡潔というより淡泊なものだった。

「元気かって……そんなことわざわざメールしてくんなよ」

呟きながら、こちらからも簡潔な返信を送る。

親元から離れて、もう十年になる。会社を辞めてバイト生活に入った時は、少しばかり陰悪にもなった。でも今は、時折『結婚』や『孫』の話題を口にする以外では、良好な関係にある。

「オレのことより、自分達の心配しろよな」

まだ定年ではないものの、両親はかなりの歳だ。取り立てて親孝行をしようとまでは思わないが、せめて迷惑を掛けないようにしようという程度の気概はある。

だが、ハローワークに目ぼしい仕事はなかった。

冷蔵庫からドリンクを取り出し、それを飲みつつネットを渡る。

今日も、掲示板は荒れていなかった。

次の日、目が覚めると電話が鳴っていた。

R R R R R R R R …… R R R R R R R R ……

オレは動かない。

R R R R R R R R …… R R R R R R R R ……

いや、動けなかった。

R R R R R R R R …… R ……

鳴り止む。静寂が戻る。

秒針が、相変わらずうるさかった。

オレはいつものようにモニターと向き合い、メールとニュースサイトをチェックする。ついでにハローワークも見ておいた。

世界は、何一つ変わっていない。

冷蔵庫を開けると、昨日と同じ場所からドリンクを取り出す。

モニターの前に戻ってくると、ネットを渡り歩く。

やはり、今日も掲示板は何一つ荒れていない。

どこも気味が悪いくらいに、理想的なコメントで埋まっている。

誰一人、自らの嫌悪をぶつけてくる愚か者はいなかった。

オレはキーボードから手を離す。

天井からぶら下がっている、古い蛍光灯を見上げる。

秒針だけが、正確なリズムを刻んでいた。

「あ……」

そして気付く。

何かがおかしい、ということに。

世界もオレも、どこか歪んでいるように感じた。掲示板が荒れていないことも、階下や隣室が妙に静かなことも、三日くらい何も食べていないのに腹が減らないことも、昼なのか夜なのか全くわからないことも、何もかもが不可解だった。

気味が悪い。

そう、気味が悪かった。

まるで世界にはオレしかいなくて、この世からオレ一人がはぐれてしまったかのような、得体の知れない孤独感と焦燥感が湧き上がってくる。

オレは居間を飛び出し、玄関に向かう。

ドアノブに手を掛け、鍵を開けた。

そのまま勢いで手首を回す。

そこで息を呑んだ。

怖いと思った。

「怖い？ 何が？」

ただ外に出るだけだ。月を見て、あるいは太陽を見て、深呼吸して戻ってくるだけだ。世界に一人などという馬鹿げた妄想を、笑いながら否定するだけの話なんだ。

そのの、どこが怖いっ！

オレは身体ごとドアにぶつかるようにして、勢い良く外の世界へと飛び出した。

飛び出した先は、闇だった。

夜ではない。それは紛れもなく、室内に溜まった闇の中だった。想定していた景色と違っていたので戸惑ったものの、その混乱は一

瞬で終わる。

闇の中に浮かぶ微かな輪郭に、見覚えがあったからだ。

そこはオレの部屋だった。

その玄関だった。

カツカツカツカツ……ギー、ボタンツ！

隣人の出入りは、相変わらず無遠慮だ。

気付けば、先程まで聞こえなかった階下からのテレビが聞こえる。次いで響く突然の地鳴りが、トラックの通過と共にやってくる。その全てが、あるべき日常だった。

RRRRRRRR……RRRRRRRR……

いきなりの電子音に鳥肌が立ち、意識が研ぎ澄まされる。

視界の真ん中で緑色の光が明滅を繰り返している。

電話だった。

RRRRRRRR……RRRRRRRR……

オレは誘われるように一步を踏み出し、そこで気付いた。

電話近くの床に、何かが倒れている。しかもその何かは、こちらを見ていた。

RRRRRRRR……RRRRRRRR……

息が止まる。いや、心臓が止まったような気がした。

信じられるハズがない。

そこに倒れているのが、自分自身だなんて。

奴は胸を押さえ、電話に手を伸ばした状態のまま力尽きていた。その眼差しは虚空を見詰めて、口はだらしなく開いたままだった。息をしていないことも、心臓が動いていないことも、確認するまでもなくわかった。

RRRRRRRR……RRRRRRRR……

いや、違う！

これは何かの間違いだ。誰かの悪戯だ。そうじゃなきゃ夢だ。だとしたら、この数日は何だったんだ。

ハローワークを確認した。掲示板に書き込んだ。サイダーも飲ん

だ。母親のメールに返信もした。

あれが全部、幻だったとでも言うのか？

R R R R R R R R …… R R R R R R R R ……

五回目のコールが終わった後、留守番電話へと切り替わる。

『タカシ、電話でもメールでもいいから、返事くらい寄越しなさいよ。とりあえず荷物は送ったから、明日届くからね。野菜も入れといたから、お弁当やカップ麺だけじゃなくて、ちゃんと料理して食べるんだよ。じゃあね』

聞き慣れた声だった。

理由がわからず、何故か涙が溢れた。

「……何だよ、これ」

もついい。

こんなのは違う。ただの夢だ。間違いない。

そう思い込んで、再びドアへと向かう。

ドアノブを捻り、ここから脱出……しようとして、手がノブをすり抜けた。腕も、足も、頭もすり抜けた。

その先に待っていたのは、またも闇だった。

いや、またというのは正確ではないかもしれない。

それは夜とは違う、無という名の闇だった。

身体が溶けていく。

ああ、そうか。

この瞬間、オレは自分がすでに死んでいるという事実をシッタ……。

（後書き）

さあ、酷評どんと来いっ！

すいません。やっぱりあまり虐めないでください。
心臓麻痺でショック死しますんで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4347h/>

シッタ

2010年10月8日15時14分発行